

北上プロジェクト

岩 城 英 夫

1. はじめに

北上プロジェクト（北上 Prj.）「流域文化の成立と定住様式の変遷に関する文明生態史的研究」は、環境科学研究科の大型プロジェクト研究（学内プロジェクト）として、岩手県の北上川流域を主な調査対象地とし、昭和53年から55年の3年間実施された。この研究には環境科学研究科の教官・技官を中心に35名の研究者および多数の大学院学生が参加した。研究代表者は初代の研究科長である故辰巳修三教授（昭和53, 54年度）と斎藤一雄教授（昭和55年度）である。一方、この北上 Prj. とほぼ平行して、川喜田二郎教授を研究代表者とする安家プロジェクト（安家 Prj.）「生態系把握と住民参画に基づく山岳諸地域の活性化に関する比較研究」が文部省の科学研究費を得て、昭和54年から56年までの3年間実施された。安家 Prj. は岩泉町安家地区を主な調査対象としたが、安家は北上山地にあることからこのプロジェクトは北上 Prj. の一翼を担うことになり、後に述べるように北上 Prj. の前衛的役割を果たしてきた。

北上 Prj. と安家 Prj. の内容と経過については、研究科年報の3, 4, 5号に既に報告されているので、詳細はそれを見て頂きたいと思う。また、この研究の成果は「みちのくの文明生態史的研究」として出版する計画であり、既に原稿も完成している。思えば、このプロジェクトの発足から既に7年を経過し、この間に、研究代表者を務めた辰巳教授は故人となられ、斎藤教授と川喜田教授も本学を去られ、一分担研究者であった私がこの稿を書くことになったのは、感慨無量である。これまでの記録に基づいて北上 Prj. の内容と経過の概要を述べるが、必ずしも正確でない部分があるかもしれない。その点をご容赦頂きたい。

2. プロジェクトの目的

この研究の目的は、地域住民の定住意識とその背景である地域構造に着目し、1) 対象地域で現になが起っているか、2) その問題解決になにをなすべきか、を環境科学的に解明し、同時にこの研究を通じて環境科学そのものの方法論をも鍛えあげることにあつた。この研究課題のキーワードは「文化」、「定住」、「文明」、「生態」の4つであり、特に文明生態史的視点が重視された。

研究の対象に北上川流域を選んだのは次の理由による。1) この地域がわが国の流域文化圏として、また開発後進地域として特異な位置を占めていること、2) その当時、運輸（東北新幹線、東

北自動車道など)、産業(国の食糧基地,大規模畜産等)ならびに生活環境上,内生・外生ポテンシャルの大きな変化が予想され,その本質的な対策が要請されていたこと,などである。

3. 研究の方法と展開

このような大型の総合的研究において従来見られた共通の欠陥は,個別的専門レベルのデータの単なる寄せ集めに終わりがちで,複雑多岐な環境問題の本質に深く迫りえないということである。これを克服し,真に学際的な研究として北上 Proj. を推進するため,調査に先立って研究者間で問題意識の共有化を図ることに力が注がれた。

このための方法論として,川喜田教授の提案した Key Problem Approach 「急所に挑む方式」(略称:KPA)が採用された。KPA の第一歩は問題提起である。研究者は現地に入る前に問題意識の統合を図り,現地を見て「土地勘」を得た上でさらに問題意識の共通化を図る。このステップを経た後,第二歩として地域の現状把握に進む。これは医者「問診」にあたるもので,現地で地域住民の声を聞き,研究者と住民の間で問題意識の共有化を図ることである。本格的な実態調査はこれらの段階を経て行なわれた。

北上 Proj. の第1年目はほとんどこの問診にあてられた。昭和53年3月29日の第1回研究打合せ会を皮切りに12回の会議と3回の研修合宿(7月,9月,54年3月)が行なわれ,また6月の予備調査にはじまる11件に及ぶ現地調査が行われた。現地住民とのプレーストーミングは松尾村,葛巻町,沢内村,湯田町,和賀町,盛岡市,一関市で実施された。こうして,昭和53年度は対象地域における問題のありかを探り,調査重点項目を抽出することに重点がおかれた。この成果は昭和54年7月に筑波大学の学内報告会で報告され,岩手県からの出席者を含め150名が参加した。つづいて7月中旬には一関,盛岡,湯田で現地報告会が開かれ,研究者のほか多数の住民が参加した。内容の詳細は昭和53年度調査研究報告書及び資料集(環境科学研究科,北上プロジェクト研究事務局)にしるされている。

このような問診にあたる調査の後に,研究はフィールドワークによる地域の実態調査に進んだ。そこでは,大きく二つの研究方法が併用された。ひとつは,特定の地域(安家,和賀,沢内,遠野など)に住み込み,その文化生態系としての特性を,通時的視点をふまえて明らかにし,住民と連携して活性化の道を求める研究である。他方は,多分野の研究者が,共通の問題意識を持ちつつ,より専門的な眼で地域の実態をおさえる研究である。

特に昭和54年8月,川喜田教授を中心とする安家グループによって行なわれた約1ヶ月に及ぶ現地調査は画期的なものであった。現地にテント村を設置し,教官・技官・院生・学生が泊りこみ,まず住民との接触を通じて意志の疎通を図った上で,この調査期間の最後には住民と「明日の安家を考える会」という討論会を開催した。こうした積み重ねの上で,秋から冬にかけて実態調査を行なった。さらに昭和55年8月には,地域の実態把握を深め,住民との連帯を強めるため,現地で「安家大学」という住民との共同勉強会を実施し,のべ159名の参加者を得,その終了時には参加者の発意により「安家大学同窓会」が設立された。昭和56年3月には,この勉強会での討議内容を統合

した成果の現地報告会が開かれた。さらに、昭和56年8月には安家大学同窓会主催による「安家会議」が開催された。これは岩手県下山村地域で独自の村づくりに挑戦する具体的ケースの発表を含むシンポジウムであり、この会議は安家住民のみならず、県下の住民に大きな刺激を与えた。このように、地域の実態把握は住民参画と有機的に結合して進められ真の問題点を研究者と住民が一体となって把握するという方向に向かった。

4. 研究内容と研究組織

北上 Prj. 研究の第1年目は、前述のように、対象地域全体についての問題のありか、調査重点項目を明確化することに主眼が置かれた。この結果、対象地域に共通する具体的問題として次の6つの課題が抽出された。

- 1) 地域振興は自力更正により連帯の中で自律的に図られるものでなければならない。
- 2) 地域の連帯性、自律性を深めるためにも「教育」が重要である。
- 3) 自力更正を目指す農業問題にどのように対処するか。
- 4) 大規模開発事業に対して定住の視点からどのように対処すべきか。
- 5) 流域を単位とした水問題対策。
- 6) 定住問題を地域はどのようにとらえるか。

北上 Prj. 研究の第2年目は、第1年目の作業を補足しつつ、具体的な事実の相互関連を明らかにして問題の構造をさぐろうとする段階で、諸問題の位置づけを明らかにすることに重点が置かれた。調査対象地域は、(1)和賀川流域(沢内村、湯田町、和賀町、江釣子村、北上市)、(2)松尾村、(3)岩手町、(4)葛巻町、岩泉町安家、(5)遠野市、(6)盛岡市等都市群、(7)北上川下流域、の7地域である。なお昭和54年度の調査は夏期を中心に行なわれたが、その内容を同年10月から約3ヶ月にわたって行なわれた公開発表のテーマから見ると、次のようになる。(カッコ内は発表者)。

- 畑作の変遷と現状(小田、大垣、鈴木)、和賀町の農業の現状(花田、市川、中島)
- 農業の施設化と定住化(相原)、モータリゼーションの問題(江崎)
- 人および所得形成力からみた農業、農村の変貌(山下)
- 北上川下流域調査報告(天田)、中流域の排水の環境衛生等(山中、緒方)
- 北上山系の荒廃裸地(岩城、足立)、安家調査概要(齊木)
- 和賀川流域・松尾村の空間特性(斎藤、糸賀、木原)
- 和賀川流域夏期調査報告(土方、真貝、秋山、長橋、大山)
- 都市化問題(安田、土方)、メンタルマップ(安仁屋)

第3年目(昭和55年度)は、地域のそれぞれの問題について専門的な見地からの詳しい調査が進む一方、全体の調整が行なわれた。全体の調整については、地域によって調査進度にズレを生じていたため、北上全域についての重要課題を荒けずりにでも把握しておくことが問題の統合にとって有効ということで意見が一致し、いわば「エゾとはなにか」という北上自体の個性に係わるいくつ

かのテーマが選択されて、集中的に討議された。この議論が事実上最終的なまとめの基礎となった。

昭和55年11月から56年2月にかけて開かれた公開ゼミのテーマからその討議の内容を見ると次のようになる。(カッコ内は問題提起者)。

- 1) 北上河谷の特性と空間パターンの形態について (黒崎, 天田)
- 2) 地域形成のオーガナイザーは何か—川は流域形成にどのような役割を演じてきたか (斎藤, 黒崎)
- 3) 落葉広葉樹林とはわれわれにとって何か—奥羽山脈と北上山地の比較を通して— (川喜田, 岩城)
- 4) エゾとは何か—移動的人間と定着的人間— (川喜田, 加藤)
- 5) 新しい変革に向かってチャレンジしている町村の模索の姿 (糸賀, 大垣, 花田)
- 6) 近代化とは地域にとって何を意味するか (市川, 坂下)

北上 Prj. 研究には多数の教官・技官が参加した。次に示すのは昭和55年度の研究者名簿 (学生は除く) であるが、このほかに初年度には、菊池利夫, 千葉徳爾, 清水寛一, 藤原喜久夫の各教授が参加した。

代表者: 辰巳修三 (昭和53, 54年) 斎藤一雄 (昭和55年)

分担者: 〈都市域〉坂下 昇, 安田八十五, 土方正夫

〈北上山系〉(遠野)掛谷 誠, (安家)川喜田二郎, 糸賀 黎, 齋木崇人,
(葛巻)岩城英夫

〈和賀川流域〉辰巳修三, 斎藤一雄, 糸賀 黎, 土方正夫, 相原良安, 江崎春雄,
佐原伝三, 上野正実, 瀬能誠之, 鈴木博雄

〈北上川中・下流〉黒崎千春, 天田高白

〈松尾村〉糸賀 黎

〈農林〉小田桂三郎, 大垣智昭, 鈴木芳夫, 花田毅一, 山下雄三, 市川忠雄, 中島紀一

〈環境衛生等〉山中 啓, 下條信弘, 小池和子

〈メンタルマップ〉安仁屋政武

〈自然保護〉藤原英司

5. 研究成果のまとめ

北上 Prj. は、昭和55年度で、また安家 Prj. は昭和56年度で調査を終了したが、その後も個別的な研究は続けられた。又、昭和57, 58, 59年度を通じて、成果を取りまとめるための討議が行なわれた。北上 Prj. と安家 Prj. の研究成果は「みちのくの文明生態史的研究」と題する学術図書として出版する計画で、既に原稿は完成している。本書は次のような構成からなっている。

序 研究の目的と方法。1章 住みやすさ, 住みにくさをめぐる北上川流域・諸市町村住民の声。2章 自然の基盤。3章 北上川の治水・利水の変遷。4章 常民の暮らしと心にみる地域性。5章 景観・土地利用・住まい方。6章 自然の適正利用と住民の知恵。7章 地

域に根ざした農畜産業の動態と展望。 8章 生業複合とそれを支えた社会と文化。 9章 医療・衛生・厚生。 10章 近代化と都市・農村問題。 11章 地域づくりへの挑戦。 結 北上地域における生態史的秩序の展開—理論構築に向かって—。

本書において北上 Proj. の調査結果は、現代の「みちのく」が直面している諸問題の根源が、やませ・低温・洪水・豪雪などをもたらす東北的自然と共存してきた伝統的な生活秩序の累積過程（生態史のプロセス）と、近代化（文明史のプロセス）との相互交渉の中に潜んでいる、とする史観に立ってまとめられた。その分析は、地形・気候・植生などの自然特性と、経済・社会・文化を含めた生活総体および「地域づくり」の運動にまで及ぶ。そして「みちのく」の生態史が、狩猟・採集・雑穀畑作・牛馬の飼育などに裏打ちされた「エゾ文化生態系」の原理を基層部で持続しつつ、稲作化・工業化・都市化・大規模化・画一化・中央集権化の傾向をもつ文明史のプロセスと相克・融合する姿こそ、現代の「みちのく」の生活実態であることが明らかにされ、今後の進むべき道が検討された。

北上 Proj. および安家 Proj. には多数の院生が参加した。これらのプロジェクトに係わる修士論文の数は17篇にのぼる。論文提出者は、昭和55年度3名（林日出喜，木原茂夫，長橋 敦），56年度10名（足立秀樹，金山昌一，杉山是清，小林基哉，巢山広美，市石 博，若林泰志，馬場美貴男，杉野光明，橋本隆之），57年度2名（石沢 宏，井関俊輔），58年度2名（今橋克寿，岡 恵介）である。